

〔駐村研究員だより〕

35 年前のアメリカ酪農の夢実現

ナギキヨウイチ
鈴木 洋 一

私の住んでいる士幌町は、北海道十勝平野の帯広から北に位置する人口 7,000 人の小さな町で、明治 31 年岐阜県人 43 戸の集団入植により開かれた純農村です。面積の 60% が農地で、農家数は 450 戸、畑作と畜産の販売額が 210 億円(畑作 90 億円、畜産 120 億円)で、日本一と言われる農業が確立されました。

昭和初期、農民の手で栽培した農産物は農民の手で加工して、農民の手で消費者のもとへ届けるという付加価値農業を考え、太田寛一氏、安村志朗氏が掲げた「農村ユートピア」の理想の下で、汗と涙で暗夜に灯をともしような難渋と苦闘の努力で農村士幌が築かれたのです。

私は先の苦しい時代から今日の豊かな時代まで酪農の歴史と共に時代の流れを体験してきました。戦争中日本が貧乏に喘いでいた昭和 17 年に生まれ、高校卒業後農業を継ぎ、2 年間畑酪経営をしましたが、機会があり、昭和 38 年から 2 カ年アメリカ、イリノイ州のシャンブリック牧場で酪農を研修する事が出来ました。

当時の北海道の酪農は搾乳、収穫すべて手作業でしたが、アメリカでは搾乳はパーラーやパイプラインミルカー、牛乳の冷却もバルククーラー、収穫も機械作業、とそれまで見た事も聞いた事もない現実に直面し驚いたものでした。なかでも驚いたのは、私が研修した牧場に自家用飛行機(セスナ 4 人乗り)があり、私が住んだジュノウと言う田舎の研修生の住宅に水洗トイレがあった事です。今から 35 年前、私は日本とアメリカの違いのあまりの大きさに戸惑いましたが、反面私の夢も

この時生まれたのでした。

昭和 40 年に帰国した私は 22 歳で、すぐその年度から経営を任されました。当時、そのような若さで経営者になれる人は、あまり居ませんでした。

当時は畑作が主体で乳牛 10 頭のうち搾乳牛が 5 頭でしたから、5 年間は畑作物を生産し、昭和 46 年から酪農専業へ移行しました。

アメリカのような酪農を築くには自然体で行くと年数がかかると思い、昭和 46 年に総合施設資金を借入し、大型サイロ、自動給餌機、濃厚飼料給餌にコンピューターを日本で最初に導入し、労働の省力化と多頭化を進めました。人間が乳牛に給餌するのではなく、乳牛が自分で給餌場へ来て食べるフリーストール方式と、更にコンピューターで自動的に給餌する事によって、乳牛個体の乳量に合った給与量と一群飼が可能となり、家族労働で多頭飼育が出来るようになりました。

平成元年頃になると、頭数増と共に古い搾乳室での作業も搾乳時間が一日 8 時間に及んで大変なので、パーラーを計画しました。当時アメリカで新しい方式ライトアングルパーラーが開発されたと聞き、すぐ渡米して日本で最初にそれを導入しました。10 頭ダブルは新しい搾乳方式として評価の高いものでした。その後町内にも普及、現在では 90 戸の酪農家中 30 戸がフリーストール、パーラー方式で大型化に取り組んで居ます。

私の酪農も 35 年になり、現在では総頭数 310 頭、うち搾乳牛 145 頭で、平成 11 年出荷乳量 1,350 トンとなりました。この規模となると堆肥の問題も含め環境問題があり、平成 10 年、11 年と 2 年間で施設を整えました。仔牛の哺乳も一人工かかるようになったので、省力化のため自動哺乳機も導入し万全となりました。

一方農場周辺環境は、アメリカで見た農場環境を目標に 35 年前から少しずつ手掛け、宅地敷地 3.5 ha を花壇、芝生、舗装、コンクリー

トで整備し、都会の人が憧れる牧場にしようと努力しています。

平成7年には、北海道酪農の事績顕彰として、酪農家として名誉ある宇都宮賞をいただき感激しております。

今後も、酪農後継者や都会の若者が酪農に夢を持ち、生活を楽しめるような酪農経営を目指して参ります。

(北海道士幌町・酪農業)